

何でも読もう会

書物名	『太陽の季節』 石原慎太郎	開催 日時	2023.5.1	推薦	
巻・章	全編			出席者	8名
<p>芥川賞全集—5—を毎月読み比べてきた。松本清張、小島信夫、庄野潤三、遠藤周作、近藤啓太郎、菊村到、開高健、大江健三郎——S27～S33にかけての受賞作だ。</p> <p>この巻の最後に石原慎太郎『太陽の季節』を読んだ。S30/下期の受賞である。</p> <p>昭和30年は、最早戦後でない、といわれ、その後の経済成長期の出発点となる神武景気の時である。また、保守党の大合同、社会党の大合同、共産党の方針転換（六全協）など政治が大きくうねった時期でもある。</p> <p>この時期に登場したのが石原である。彼のこの作品はアンチモラルと言われ、賛否両論の議論を巻き起こしたそう。審査員の間でも意見が大きく分かれている。</p> <p>思うに、上記の各受賞作にはインテリから見た戦争の影—反省、悔悟、挫折などがつきまとうが、石原の作品にはみじんもない。次は俺たちの時代だ、ロートルは引っ込めというギラギラしたものがある。まさに「太陽の季節」であった。</p> <p>推薦者はこのように主張したが、メンバーの反応は今いち、やはりこれはエンタメ系なのだろうか。</p>					